

「不定語疑問文の主題化」の歴史

北崎 勇帆（高知大学）

要旨

本稿では不定語疑問文の回答部を話者自身が説明する表現を「不定項説明の表現」と規定し、その歴史について以下の3点を示した。

- (i) 元来の和文は「その理由は」のようにして語彙的に説明する方法のみを持ち、「なぜかといえば」のような疑問節の埋め込み（不定語疑問文の主題化）を手段として持たない。
- (ii) 不定語疑問文の主題化は漢文訓読によって生まれた表現であり、「疑問文+ト+ナリ」を用いる「トナリ型」、発話動詞を用いる型「発話動詞型」、「疑問文+ナリ」を用いる「ナリ型」の順に成立する。
- (iii) ナリ型は発話動詞型に吸収される形で衰退するが、理由を問うタイプの疑問文のみ、その不定の性質によって残存し、接続詞ナゼナラ（バ）として現代語に至る。

キーワード：不定語疑問文，引用構文，接続詞，漢文訓読，講義体

The Historical Transition of Wh-question Topicalization in Japanese

KITAZAKI Yuho (Kochi University)

Abstract

This study deals with the history of expressions in which the speakers themselves explain the answer to wh-questions, and clarifies the following three points.

- (i) In the original Japanese language, only a lexical expression such as *sono riyuu wa* 'the reason is' was used, and there was no means to embed a question clause (topicalization of wh-questions) such as *nazeka to ieba* 'if asked why'.
- (ii) Wh-question topicalization is an expression derived from reading Chinese

texts and developed in three stages: wh-question + *to nari* (*tonari* type), using a speech verb such as *to ieba* (speech verb type), and wh-question + *nari* (*nari* type).

(iii) Most of the *nari*-type have been absorbed into the speech verb type and are no longer used, but only the “Why” type remains in modern Japanese as the conjunction *nazenara* (*ba*).

Keywords: wh-question, quotative, conjunction, *kanbun kundoku* (vernacular reading), lecture style

1. はじめに

不定語疑問文は (1a) のように、話者にとって未知である不定項（下例では「院政期を中世に含める理由」）を提示して、その特定を聞き手に求めるものであるが、この不定項が話し手にとって既知であるとき、説明を聞き手に要求せず、話し手自身が行うことがある。現代共通語（以下、現代語）では (1b) のように、不定語疑問文をトイエバ節などの発話動詞を用いた条件節に埋め込んで主題化するほか、条件表現を構成要素に持つ接続詞を用いる場合 (1c) や、「理由」などの名詞を用いて語彙的に実現する場合 (1d) がある。

- (1) a. 「なぜ院政期を中世に含めるんですか?」「この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです」
 b. なぜ院政期を中世に含めるのか {たとえば/という}、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。
 c. なぜなら、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。
 d. その理由は、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。

本稿ではこのような、不定語疑問文における回答を話し手自身が行う表現を「不定項説明の表現」、特に、不定語疑問文を埋め込むタイプの構文を「不定語疑問文の主題化」と規定して、歴史的な展開を探ることを目的とする。

以下、当該表現の歴史的な検討に際して、問題となる点を述べる。第一に、現代語に見出される (1b, c) のような型は、平安時代の和文には見出されず、他方で近代以前の資料には、(2a)「疑問文+ト+ナレバ」(以下「トナリ型」),

(2b)「疑問文+ナレバ」(以下「ナリ型」)のような、現代語と逐語的に可換ではない型が見出される。まずはこれらの種々の型の歴史的変遷を明らかにすることを一つの目的としたい。この点についてはまず、第2節で外形的な記述を行った上で、それぞれの型の成立について、3.1, 3.2で検討を行う。

(2) a. ^(なにをもちてのゆゑ)何以故とならば、菩提と及心とは同(じ)ク真如なるのみ。(何以故菩提及心同真如)(金光明最勝王經平安初期点・巻4 [830頃] 60-16)

b. 何として知ぞなれば、其国の風土を誉つ、^{ホメ}そしつゝして、歌を作て歌ふ程に、其を以て知ぞ。(毛詩抄・巻1 [1539] 1-6-1)

第二に、(1c)の接続詞ナゼナラ(バ)は上のナリ型と関係があるものと思われるが、(3)に示すように、不定のタイプや主題の明示の可否において、(1b)のような発話動詞型に比して構文的な制約を持つ。すなわち、ナゼナラ(バ)の成立に際しては、ナリ型の機能の縮小の経緯を考慮する必要があるようである。この点については3.3で検討する。

(3) a. {どこかというと/*どこなら}, ピューロランドに來ています。
b. 院政期を中世に含めるのは{なぜかというと/*なぜなら}, この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。

第三に、次節に見るように、不定語疑問文の主題化の使用は対話を主体とする典型的な口頭語資料には少なく、訓点資料や抄物といった、講義を基盤とする資料に多く見出される¹。表現の成立と一般化において、資料の文体的な性質がどのように影響したかについては、第4節で触れることとする。

2. 用例概観

本稿で扱う構文を以下の基準で分類する。

- (4) a. トナリ型：[疑問文] + ト + ナリの条件形… (2a)
b. 発話動詞型：[疑問文] + ト + 発話動詞の条件形… (1b)
c. ナリ型：[疑問文] + ナリの条件形… (1c) (2b)

¹ 2択の不定項を提示する「どちらかという」と類だけは一般的な対話にも現れるが、成立は遅く、また、純粋な不定項の説明というよりはムシロ・カエツテと同範疇の「選択説明」(安部 2011)に用いられるものであるため、本稿の分析からは除く。

d. 語彙的な主題化… (1d)

このうち、条件形式を用いるトナリ型・発話動詞型・ナリ型は上代歌謡・中古和文には見出しにくい一方、「故は」「理由は」などによる「語彙的な主題化」は、中古以降、時代・文体を通じて一定数見られる²。

- (5) a. 道頼が思ふ心侍りて、『しばし』と制しはべりしなり。その故は、西の方に住みはべりしより、(略) こよなく思しおとされたりき。(落窪物語 [10C] 20-落窪 0986_00003, 106810)
- b. これは君の御理で御座れば、適わぬまでも院の御所を守護し奉らうず：その故は <yuye ua>、重盛今大臣の大將に至るまで然しながら君の御恩で御座る。(天草版平家物語・巻 1-6 [1592 刊] 40-天平 1592_01006, 22830)

接触によらない和文は、元来この方法しか持たなかったものと見て、本節では条件形式を用いる3種の型(4a-c)の推移を概観する。表1に、各時代・資料群における用例の分布を示す³。

表1 「不定語疑問文の主題化」の例の分布

時代	資料群	トナリ型	発話動詞型	ナリ型
上代	宣命	1	0	0
中古	訓点資料	52	3	0
	和文資料	0	1 ^{*a}	0
中世 前期	説話集	3	0	0
	仏教資料	5	0	0
中世 後期	軍記	3	8	0
	抄物	31	1132	545
	キリシタン資料	1 ^{*b}	17	0
	狂言台本	0	3 ^{*c}	0

2.1 トナリ型

不定語疑問文の主題化のうち、文献に最も早く現れるのはトナリ型である。

² ただし、中古和文の場合は下例のように、漢文訓読語を発話し得る話者の例に偏る(査読者の指摘に基づく)。「語彙的な主題化」は訓読を経ずとも産出可能な表現ではあるため、一方的な知識伝達場で用いられるという本表現の特性と、中古和文の男性話者が特権的に長文の発話を行えること(近藤2020)によってこうした偏りが生じるものと考えておく。

(i) わが君、「…」となん思うたまふる。そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。(源氏物語・明石 [1010 頃] 20-源氏 1010_00013, 78950)

³ 表1内に注を付したものはそれぞれ(a)仏の発話、(b)『天草版平家物語』の序文(文語)、(c)候体の曲に見られる例で、典型的な口語とは考えにくい例である。

上代語資料では次例 (6a) の他には例がなく、中古に至っても和文には例が見られないが、漢文訓読文には (6b, c) のように広範に見られる。築島 (1963 : 448) は早く、漢文訓読文における「何者」の訓について、「何者」等を「ナントナラバ」「ナントナレバ」と訓ずるのも、訓読特有の語形であらう。古くは、「…ナラバ」「…ナレバ」の両例があつた」と指摘する。9, 10 世紀の訓点資料における例は (6b) 仮定条件節をとるトナラバの例のみであり、(6c) トナレバの出現はそれに遅れるようである。

(6) a. 然 (れども) 其 (の) 人は、天地のうべなみゆるして授 (け) 賜 (へ) る人にも在 (ら) ず。何を以 (ち) てか知 (る) とな
らば (何_乎以_{天可}知_{止奈良方}) 志愚に心善 (から) ずして天下を治 (むる) に足 (ら) ず。(続日本紀宣命・33 詔 [765] 10-宣命 0797_26033, 2860)

b. 空を執すること芥子の如くはす可 (くあら) 不。何が
以にと^{ユエニトナラバ}なれば即 (ち) 空を執するは [者] 其の空の辺に滞 (り) ぬ。(不可執空如芥子。何以即執空者滞其空) (百法頌幽抄古点・1535 [900 頃] 111-17)

c. 若 (シ) 是 (ノ) 如 (クセ) 不ハ、彼終ニ去 (ラ) 不^ジ, …何 (ト)
者^{ナレバ} 師子暴ヲ為 (ス) コトハ、嬢 (ト) [及] 我 (ト) ニ縁 (ル)^(ヨ)
ナリ、(若不如是彼終不去…何者師子為暴縁嬢及我) (大慈恩寺三蔵法師伝永久 4 年点・巻 4-178 [1116] 131-2・築島 1963 : 449)

これを引き継ぐ形で、中世前期の和漢混淆文には以下のような例が認められる。ただし、例は多くはなく、かつ、例えば (7a) 釈迦如来や (7b) 唐人の発話など、使用者に位相的な偏りがあることが注意される。

(7) a. 汝等、少キ智ヲ以、我ガ道ノ成ジ不成セザル事ヲ軽メ疑フ事
无カレ。其ノ故何トナレバ、苦行ヲ修スレバ心悩乱ス、樂ヲ受
レバ心ニ樂着ス。(今昔物語集・巻 1-8 [12C] 1-72-7) ⁴

b. 只今コヽヲ罷リ過ギ候ガ、御琵琶ノ撥音ニツキマヒラセテ参リ

⁴ 本朝部にも以下の例があるが、やはり聖の発話中に現れるものである。

(ii) 汝ヂ、法花ヲ棄テ、最勝ヲ可持シ。其ノ故何トナレバ、最勝ハ甚深ナル事余経ニ勝レ給ヘルニ依テ、最勝王経トハ云也。(今昔物語集・巻 13-40 [12C] 30-今昔 1100_13040, 1790)

テ候ナリ。イカムトナレバ，テイビムニ琵琶ノ三曲ヲ授シ時，
一ノ秘曲ヲノコセリ。(延慶本平家物語・第2本[13C]上314-14)

中世後期においても，抄物ではトナリ型が引き続き用いられるものの，
原典の訓読やそれに準ずる箇所に出現が偏る。トナリ型は当期において既に，
口語では活発ではなかったものと見られる⁵。

- (8) 有求足開得足脛者不得繫者足脛不出開出其ト病也 足開而死者
内高而外下也 言ハ凡足開ハ，百事ニ吉ナルニ，ナゼニト^ルニレ
病^ヲカギツテ，足開而死ゾトナレバ，内高而外下ナレバゾ。(史
記桃源抄・亀策列伝 [1477] 5-263-7)

2.2 発話動詞型

発話動詞型は上代語資料には見出されず，中古和文において，(9a)『うつ
ほ物語』に1例のみ見られる。仏が現れて説法を行う場面で，明らかに漢文
訓読文の影響を受けた例であるので，中古和文で一般的に発話動詞型が用い
られたものとは考えない。同時期の漢文訓読文にも発話動詞型の例が僅かに
見られるものの⁶，基本的には前項に述べたトナリ型を取るようである。

- (9) a. 仏あらはれての給はく，「…この日の本の衆生は，生々世々に人
の身をうくべきものにあらず。そのゆへはいかにといへば，まへ
の世に淫欲の罪はかりなし。…」(うつほ物語・俊蔭 [10C] 12-15)
b. 所以者何といは〔者〕，上の漢羅の一乗を信(ぜ)不^ぬ義を積す
〔也〕。(所以者何者積上羅漢不信一乗義也)(法華義疏長保4年
点・方便品末 [1002] 441-7)

これらの例を除けば，発話動詞型が安定して見られ始めるのは鎌倉期に入っ

⁵ 『日葡辞書』の「いかん」の項の語釈では、「いかんとなれば」を id est (すなわち) の注記によって，発話動詞型の「なぜにというに」に置き換えて説明する。『日葡辞書』の「被注記語：注記語」は「難：易」の関係にあり(中野 2019)，この例からも，トナリ型が口語的でなくなっていたことが確認できる。

(iii) Ican. イカン(如何) どんな具合にして，または，どうして. 文書語. ¶ Icanto nareba. (如何となれば) すなわち，Najenito yūni. (何故にと言ふに) このことの意味は…である。(日葡辞書 [1603 刊] 邦訳 322L)

⁶ (9b) の例は，「者」字の訓に「トイフハ」「トイハ」があること(大坪 1959)を基盤とし，この訓によって「所以者何者」を「(所以は) …トイハ」と訓んだものと思われる。

てからであり、この後も引き続き用いられ、そのまま現代語に至ったものと考えられる。

- (10) 来八月十五日以前ハイカニモ思立ジト思也。其ハイカニトイフニ、今明謀反ヲ発シテ合戦ヲスルナラバ、…定テ違乱トナリナムズ。(延慶本平家物語・第2末 [13C] 上 493-14)
- (11) a. 知者ハナゼニ水ヲ楽ムゾト云ニ、常ニ我智恵ヲ憎^(増)長セントテ、心ヲ動瑤スルヲ、水ノ流動スルガ如也。(応永本論語抄・雍也第六 [1420] 292-7)
- b. 漢家四百年ノ創業ハ、意^イ豁^{クワツ}如也ノ四字ニアルゾトヲセラレタヲバシ、カウ聴ナシタカト、推量シタゾ。ナゼニト云ヘバ、此四字ニカギリテ、音ニ読テヲキゴトハ、不審ゾ。(史記桃源抄・高祖本紀 [1477] 2-82-12)

ただし、不定項の説明という表現そのものが資料の性質に制約を受けるようであり、同じ中世後期の口語資料であっても、キリシタン資料・狂言台本には例が現れにくい。(12a)は教訓を示す箇所、(12b)は候体の曲中での使用であり、典型的な口頭の対話での使用例ではない。

- (12) a. かの獣の我に教訓を成いた：それを何ぞと言うに 〈nanzoto yū ni〉、汝向後御身の様に大事に臨うで見放さうずる者と知音すなど。(エソポのハブラス・471 [1593 刊] 40-天伊 1593_00033, 2430)
- b. 「かやうに候者は、…しよこう民百性に至るまで、此君をあがめたてまつる、それをいかにと云ふに、殷の紂王の御まつりごと散れ、悪ぎやくぶたうを巧み給ひ、…(虎明本狂言集・武王 [1642 写] 40-虎明 1642_08002, 780)

2.3 ナリ型

ナリ型の成立はトナリ型・発話動詞型に比して遅く、中世後期の抄物に至って見られるようになる。その後、典型的な口語資料として扱われる資料では隔絶するが、(14b)にも示すように、国字解や心学道話などの講義体の資料には引き続き用いられる。

- (13) a. 其ヲバ何トシテ注スゾナレバ, 論-談決-択シテ注スニ依テ論
ト云也。(応永本論語抄・学而第一 [1420] 9-2) ⁷
- b. 三人と云は誰ぞなれば, 夏桀一人と唐虞の子孫とぞ。(毛詩抄・
卷 20 [1539] 4-451-5)
- c. サテ比口ハ, イツゾナレバ, 寒食ノ時節ゾ。(三体詩素隠抄・
卷 1 [1622 刊] 52 オ 9)

文頭で前文の内容を承ける接続詞的な使用も, 15 世紀後半には見られる。ナゼニナレバが現代語と同様のナゼナラ (バ) へと転じた時期は定かでないが, (14c) の例より, ナゼニにおけるニの脱落と, ナレバからナラバへの交替⁸を経て, 19 世紀中には生じていたものと見ておく。

- (14) a. 南越尉佗ニカギリテ尉トヨムゾ。ナゼニナレバ, 初ハ南越ノ
尉デアツタガ, 其後ニ王ニナツテモ, 其官ノ字ヲ, 姓ノ様ニ尉
佗ト云ゾ。(史記桃源抄・秦始皇本紀 [1477] 1-351-13)
- b. 一たび本心を見おぼえますると, 其あとから, すこし斗の身最
肩身勝手が出来ても直に知れる。なぜなれば本心のあきらかなる,
無理のない事を見覚た故…(鳩翁道話・卷 2 上 [1835 刊] 11 オ 7)
- c. 是この冊子に相似たり ナゼナラバ。文面に古文の看板を出し。不
佞種彦木戸番となつて鉄鏈を鳴し。(家満安楽志・序 [1808 刊] 33
上 5, 小学館『日本国語大辞典』第 2 版, 「なぜならば」の項)

3. 現象の解釈

⁷ この「疑問文+ナレバ」をひとつづきのものと見てよいかという問題について述べる。湯澤 (1929 : 253) はこれを, 独立した「疑問の文句を承けてこれを解説するに用いる」接続詞のナレバと見たが, 鈴木 (1972 : 391-393) は, 疑問文が後続部へと続くものの存在を認めており, 青木 (2022 : 95) も鈴木 (1972) を踏まえ, 当該構文を「直接引用または間接引用の「文相当」句を「文相当」形式のまま示し, 「なれば／なれども／じゃほどに」などの「コピュラ+接続助詞」形式を用いて後続文に繋げる, 様々な構文パターン」の中に位置付けている。

本稿では, 句点が密な抄物においても疑問文とナレバの間に句点のない例が一定数見られることや, キリシタン資料にピリオドやコロンなどの文区切りの符号を介さない例があることに鑑みて, ポーズを置かない「疑問文+ナレバ」の存在を認める立場を取る。

⁸ この交替は, 近世に進行したナレバを含む已然形+バの衰退と, ナラバの恒常条件への侵出 (矢島 2013) に沿って起こったものと見る。

以上、不定項の説明に関わる4種の型の歴史的な推移を概観した。従来の和文は語彙的主題化以外の方法を持たず、不定語疑問文の主題化の中ではトナリ型の出現が早く、発話動詞型がこれに次ぐ。ナリ型は中世後期の抄物に使用があり、当期に既に、接続詞的な例も見られる。

本節では以下、不定語疑問文の主題化という構文の成立過程と、その中心的な型が発話動詞型へと移行すること(3.1)、中世後期におけるナリ型の成立過程(3.2)と、ナリ型の接続詞化の背景(3.3)について検討を行う。

3.1 不定語疑問文の主題化の成立と発話動詞型への移行

第2節では、不定項説明の表現において、従来の和文が不定語疑問文の主題化という方法を持たなかったことを述べ、2.1-2.3では条件節によって構成される型の歴史的な推移を示した。成立の早いトナリ型の初期の例が漢文訓読文に多く見出されることに基づき、当該表現は、「疑問文+解答文」という問答形式の原漢文を読み下す行為の中で発生したものと見る⁹。

こうした原漢文に対する訓読の方法にはもう一つ、疑問文と解答文が別々の文によって表される(1a)のようなパターンがあるが¹⁰、不定語疑問文の主題化は、この「疑問」と「解答」とを一文内で明示的に関連付けるという動機によって生まれたものと考えられる¹¹。このとき、引用句を承けて後続

⁹ 続紀宣命の(6a)の例は訓点資料の例よりも出現が早いですが、これも、上代に既に行われていた漢文訓読の影響を受けたものであろう。宣命と漢文訓読の関係については小谷(1986)など参照。

¹⁰ 例えば、(iv)の例は、これが2文で訓読され得たことを裏付ける。

(iv) ちち、はるかにこれをみて、つかひにかたらひていはく、「…また、くみしかたることなかれ。」ゆへはいかん。ちち、そのこ、志意、下劣なることを知れり。(父遙見之。而語使言。…莫復與語。所以者何。父知其子志意下劣。SAT: T0262_09.0016c29-0017a03)(妙一記念館本仮名書き法華経・巻2[1330頃]310-1)

¹¹ 古代漢語には接続詞的に機能する「何者」があるので(牛島1967:380)、これの影響を直接に受けたものとも考えられる。ただし、「(所以者)何」のような疑問文(牛島1967:326「疑問詞が単独で用いられる場合」)の場合にはこれを埋め込むことは難しく、単文の疑問文として機能するのが一般的であるようである。現代中国語がこれと近い様相であることについて、劉冠偉氏(東京大学史料編纂所)より教示を受けた。なお、当該表現は既定的な事態を承けるが、初期の例は仮定条件のナラバに偏る(→2.1)。これはおそらく古代漢語の「者」が仮定条件の用法を持ち、それが漢文訓読にも引き継がれたことによるもので、このことも、不定語疑問文の主題化が漢文訓読によって生じたことを裏付ける。

部と接続する方法として、上代に既に存したトナリ（辻本 2017）がその方法として採用されたのであろう。

一方、発話動詞型の例が中古の漢文訓読文に少ないのは、原漢文を訓読するという資料的・文体的な制約のもとで、原漢文に存しない動詞「言う」を独自に訳出するということが行いにくかったためであろう。中世前期の和漢混淆文に至って発話動詞型が定着するのはこのことの裏返しであり、不定語疑問文の主題化という方法を漢文訓読文から受け継ぎつつ、「原漢文に従って訓読を行う」という制約を脱したために、埋め込み節が疑問文であることを明示しやすい発話動詞が選好されたものと考え¹²。

3.2 ナリ型の成立

次に、中世後期の抄物に見られるナリ型の成立過程について検討する。このナリ型の成立については、『史記抄』などにトナレバ・ナレバの2種が見られることに基づいて、トナリ型のトが脱落することでナリ型が成立したものと論じる清水（1995）がある。しかし、トナリ型とナリ型（と発話動詞型）の同一資料での併用は、これらが共時的なバリエーションの関係にあることを示すものでしかなく、必ずしも、歴史的な派生関係にあることを含意するものではないため、本稿ではこうした見方は採らず、コピュラのナリの接続先の拡張という観点から、ナリ型の成立を捉えたい¹³。

大木（1969）、矢毛（1999）などによって知られるように、中世前期には、(15)のように、コピュラのナリによって構成されるナレバ・ナレドモが文に相当する句を承接するという現象がある。北崎（2022）はその承接句が推量

¹² 当期に至るとトイウによる複合辞が発達しており、主題提示のトイエバなどが成立していたこと（小田 2018）も背景として想定できるか。その後、中世後期以降には、トナレバの素材となるトナリ自体が口語的でなくなっていたことが以下の例の組からも窺える。このことも、発話動詞型が相対的に中心的な位置を占める一要因であったと考えられる。トナリの使用が一部の位相に偏っていくことについては、山本（2021）も参照。

(v) 三千ノ大衆，カヲ合セヨトナリ，（斯道本平家物語・巻7-67句・448-10）

(vi) 三千の衆徒に力を合わせいと頼まれたれども〈to tanomaretaredomo〉，（天草版平家物語・巻3-5 [1592刊] 40-天平1592_03005, 13720）

¹³ 引用助詞のトの脱落という現象自体も、現代では西日本方言の一部に見られるものの（小西 2013）、当期においては一般的な現象ではないので、やはり採り難い。

文・疑問文に偏ることに注目し、当該現象を、既存の已然形+バ節では行うことのできない節の関係付けの機能を補うものと位置付けている。

- (15) a. 事にふれて奇怪のふるまい共が有けんなれば、俊寛をば思ひもよらず。(高野本平家物語・赦文 [13-14C] 大木 1969 : 59)
- b. 宮もかゝるおりふし、いかでかほか住もし給べきなれば、そひみ給へり。(小夜衣 [鎌倉時代] 矢毛 1999 : 32)

すなわち、こうした「文相当句を承けるナリ」が疑問文を承ける場合は、動詞・形容詞述語の疑問文を承け(以下、動詞述語型)、不定語を述語とする(以下、不定語述語型)ことはない。このことに注目して、ナリ型成立期中世後期の抄物の例を疑問文の述語のタイプによって分類し、例数を表2に示す。

表2 抄物における不定語疑問文の主題化

資料名	成立年	トナリ型		発話動詞型		ナリ型	
		動詞	不定	動詞	不定	動詞	不定
応永本論語抄	1420	0	0	15	6	2	0
史記桃源抄	1477	12	3	42	66	20	5
蒙求抄	1529	0	0	8	4	9	3
中華若木詩抄	1533 以前	0	0	4	0	3	2
毛詩抄	1539	3	1	54	30	193	50
玉塵抄	1563	0	0	15	2	1	8
四河入海	17C 前刊	3	4	375	413	50	172
三体詩素隠抄	1622 刊	4	1	20	78	12	15

表2の『応永本論語抄』では、発話動詞型には動詞述語型・不定語述語型ともに現れるが、ナリ型には動詞述語型の例しかなく、その後、不定語述語型の例も見出されるようになる。一方、訓点資料のトナリ型や中世の軍記の発話動詞型においては動詞述語型と不定語述語型のいずれも現れる¹⁴。仮にナリ型がトナリ型と直接的な派生関係を持つならば、成立初期のナリ型にも不定語述語型の例が見出されてもよいはずであるが、上のデータからはそうした解釈が導かれない。このことを踏まえ、ナリ型はあくまでも「文相当句を承けるナリ」の用法が拡張したものと見て、その後、同じ不定語疑問文である不定語述語型の疑問文にもナリ型が波及したものと考えたい。

3.3 ナリ型の接続詞化

このナリ型は2.3に見たように、近世以降には典型的な口語資料には見ら

¹⁴ 例えば、『金光明最勝王経平安初期点』では動詞述語型と不定語述語型がそれぞれ13例と15例。『高野本平家物語』では2例と5例。

れなくなり、現代口語でも許容されないが、接続詞化したナゼナラ（バ）だけは継続的に用いられる。ここでは、ナリ型のうち、理由を問うナゼ（ニ）に限って接続詞化が生じたものと見て、その要因について考えたい。

まず、接続詞化が起こる必要条件的な背景として、文頭での生起が一般的になるという要件が挙げられる。(3b) に示したように、発話動詞型は主題を明示することができるが、接続詞化したナゼナラ（バ）ではそれが容認されない。これは (16) に示すように、理由を問う疑問文がその他の不定語疑問文とは異なり、名詞句レベルの要素を不定の内容に取りにくく、節レベルの要素を取ることに起因する¹⁵。

- (16) a. 「出身地はどこですか?」「埼玉県です」
 b. 「なぜこのテーマを選んだんですか?」「??興味です／興味があったからです」

表 3 に、表 2 中の 4 資料に現れる不定語述語型の例が明示的な主題を持つかどうかを、理由を問う場合とそれ以外の場合に分けて示す。中世後期のナリ型においても (13b, c) 「誰」「いつ」など、理由以外を問う場合には主題が提示されやすいのに対し、理由を問う場合には主題が示されない例が多い。この性質が、ナゼニナレバ類の文頭での使用を促進したものと考えられる。

表 3 不定語述語型の主題の有無

不定のタイプ 主題の明示	発話動詞型				ナリ型			
	理由		理由以外		理由		理由以外	
	有	無	有	無	有	無	有	無
応永本論語抄	3	1	2	0	0	0	0	0
史記桃源抄	9	43	9	5	0	3	0	2
蒙求抄	0	3	0	1	0	3	0	0
毛詩抄	1	5	20	4	2	26	19	3

ナリ型が全体的に用いられなくなることについては、中世後期から近世にかけて進行した、直接疑問文における終助詞ゾの脱落（外山 1957）の影響を想定したい。疑問文末のゾの脱落が進行すると、例えば「[疑問文] ズナレバ」は「[疑問文] ナレバ」となるが、この「ゾの脱落したナリ型」は不定項による理由句を焦点とする (17) 「不定語＋ナレバ」のような疑問文と表面上同形になってしまう。

¹⁵ Rizzi (2001), 金水 (2012) など参照。イカニ・ナゼニは節形式に由来するが（注 16 参照）、このことも、理由を問う疑問文の一般的な性質によるものと考えられる。

- (17) ソコヲハカラウ尉ノ官ノ者ガハラタツテ、タレナレバ [≒誰なので] 夜ルトヲルゾト云タゾ (玉塵抄・巻 25 [1563] 37 オ 2)

この中にあって、ナゼ (ニ) に限っては、(14a) などにも示したように、不定語述語の場合にも「なぜにぞ」とはならないのが一般的であり¹⁶、かつ、そもそもが理由を問うものであるために(「なぜだから」の意で)「なぜになれば」となることもない。以上の要因により、ナリ型においては、ゾの脱落が起こっても意味的な衝突が生じないナゼ (ニ) のみが残る、その他の不定語の場合は発話動詞型が用いられるようになったものとする¹⁷。

4. おわりに

本稿では「不定語疑問文の主題化」を中心とする不定項説明の表現について、以下のことを示した。

- (18) a. 不定項説明の表現のうち、不定語疑問文の主題化は、漢文訓読によって生まれたものである。
 b. 成立はトナリ型が早く、発話動詞型がこれに次ぐ。発話動詞型の成立が遅いのは、原漢文にない「言う」を独自に訳出しにくかったことによる。
 c. ナリ型は中世後期に至って、ナリの「文相当句を承ける」用法が拡張することで成立する。
 d. ナリ型のうち、理由を説明するものは、その性質上文頭に生起しやすく、直接疑問文におけるゾの脱落の影響を受けなかった

¹⁶ ナゼニはナニセムニに由来し (大坪 1983)、中世後期に機能の近似するイカニと置き換わる (于 1999)。このイカニはコンピュータを構成要素にもつためにゾを必須の要素とせず、ナゼニも主節の脱従属化 (insubordination) によって成立したため、同様にゾを要求しないものとする。

¹⁷ 現代語の場合、直接疑問文ではカの使用が任意であるのに対し、間接疑問文では必須である (金水 2012 など)。不定語疑問文の主題化もカがないと容認されず、この点、現代語の発話動詞型は間接疑問文に近い性質を持つ。

(vii) なぜ院政期に含める {(の) か/*の/*0} {を知らない。／というとき…}

当期のゾ・カの必須性についてはなお検討を要するが、仮に近世の発話動詞型が現代語と近い性質を持つ場合、発話動詞型は直接疑問文には起こったゾの脱落の影響を受けることがなく、不定語疑問文の主題化であることが担保されたため、継続的に使用されたものと考えられる。

ことも手伝って、接続詞ナゼナラ（バ）として現代語に残る。

第2節で、当該表現が同じ中世後期の口語資料の中でも、抄物には多用される一方、対話を基調とする狂言台本には見出しにくいことを述べた。この偏りは、説明に際して新たに不定項が生じた場合であっても、その不明な要素の特定のための「質問」を求めずに一方的に説明を行うという当該表現の性質が、講者から受講者への一方的な知識伝達が行われる、抄物の講義の場で好まれたことによるものであろう¹⁸。

現代語における左方転位構文について、大江・居關・鈴木（2020）は、その使用が、口頭言語の中でも話し手が専権的に話す「独演調談話」というジャンルに偏ることを指摘している。その成立には漢文訓読が関与したという見方がある（大坪 1969, 竹内 2016）、本稿で扱った不定語疑問文の主題化も、成立過程、現代語での使用状況ともに、これとよく似ている（高橋 1999）¹⁹。この類似性を意識するとき、現代語の「独演調談話」で使用される表現の一部には、論理性の重視される漢文訓読という環境で成立し、話し手が一方的に説明を行う発話場で脈々と用いられ続けて現代語に至ったものがある、という見方が可能になるだろう。このようにして、ある表現の成立や定着に対し、発話が行われる場の特性がどのように影響するかという視点を持つとき、ジャンル・スタイルという観点は、共時的な位相差だけでなく、史的研究に対しても大きな示唆を与えるはずである。

¹⁸ 抄物において当該構文が多用されることについては小林（2001）にも言及がある。なお、理由を問うタイプの場合、現代語では（1）のように原因・理由節を分裂文にした「…からだ」と呼応するのが規範的である。この呼応は（8）のように室町期には既に一般的に見られ、已然形バ+ナリ（大坪 1982）を端緒とする原因・理由形式の述語用法の発達と並行して義務的になっていくようである。このことは、本表現の生起する環境がその発達と定着に伴い、「[疑問文] といえば、[解答文]」という条件文的な複文構造から、疑問節を主題とした「[疑問文（の解答）] は [理由] からだ」という分裂文的な複文構造へと変化したことを示唆する。述語用法の発達と併せて、今後なお考えたい。

¹⁹ 例えば、国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス』（データバージョン 2018.01）で以下の検索を行うと、音声タイプが「独話・学会」「独話・模擬」である例のみが得られ、「対話」の例はない。

・語彙素「%何%」（「何」を含む語彙素）＋語彙素「か」＋語彙素「と」＋語彙素「言う」
＋品詞（中分類）「助詞-接続助詞」

調査・引用資料

表 1, 2 の集計に用いた資料に下線を引く。引用の際に、句読点・濁点を付し、異体字を通行字に改めるなどの処理を行った場合がある。また、各用例には資料の成立年・刊年、出典の巻次・頁数・行数や、『日本語歴史コーパス』からの引用の場合にはサンプル ID と開始位置を示した。

中古和文資料・中世前期説話集・軍記・天草版平家物語・エソポのハブラス・虎明本狂言集…国立国語研究所 (2022) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2022.3) / 続日本紀宣命…検索は国立国語研究所 (2020) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編Ⅱ宣命』に拠り、北川和秀編 (1982) 『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館 を用いて校訂した。 / うつほ物語…室城秀之ほか共編 (1999) 『うつほ物語の総合研究』勉誠出版 / 今昔物語集 (天竺・震旦部)・歎異抄…岩波書店『日本古典文学大系』 / 解脱門義聴集記…納富常天 (1967) 「明恵述・高信編「解脱門義聴集記」」『金沢文庫研究紀要』4 / 延慶本平家物語…北原保雄・小川栄一編 (1990-1996) 『延慶本平家物語』勉誠社 / 斯道本平家物語…慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編 (1970) 『百二十句本 平家物語』汲古書院 / 日葡辞書…土井忠生・森田武・長南実編訳 (1980) 『邦訳 日葡辞書』岩波書店 / 鳩翁道話…検索は JapanKnowledge 所収『東洋文庫』, 引用は東京書籍蔵のデジタルデータ (<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100383709/>) による。 / 家満安楽志…中央公論社『洒落本大成』 訓点資料 石山寺本四分律…大坪併治 (2001) 『石山寺本四分律古点の国語学的研究』風間書房 / 成実論天長点…稲垣瑞穂 (1954) 「東大寺図書館蔵本成実論天長点巻十二 (上) (下)」『訓点語と訓点資料』2・3, 鈴木一夫 (1954-1966) 「聖語蔵御本成実論天長点訳文稿」 / 西大寺本金光明最勝王経…春日政治 (1942) 『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』岩波書店 / 石山寺本大智度論…大坪併治 (2005) 『石山寺本大智度論古点の国語学的研究』風間書房 / 東大寺図書館蔵百法顕幽抄…稲垣瑞穂 (1976) 「東大寺図書館蔵本百法顕幽抄古点」『訓点語と訓点資料』58 / 法華経玄賛淳祐点・法華義疏長保 4 年点…中田祝夫 (1958) 『古点本の国語学的研究 訳文編』勉誠社 / 興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点…築島裕 (1965) 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』東京大学出版会 / 妙一記念館本仮名書き法華経…中田祝夫・小林祥次郎・柏谷直樹共編 (1991) 『妙一記念館本仮名書き法華経』霊友会 抄物 応永本論語抄…中田祝夫 (1976) 『東山御文庫蔵称光天皇宸翰 応永二十七年本論語抄』勉誠社 / 史記桃源抄…亀井孝・水沢利忠 (1965-1973) 『史記桃源抄の研究』日本学術振興会, 住谷芳幸氏によるテキストデータ (<http://www.nabaya.net/kaken.htm>) を検索に用いた。 / 蒙求抄…岡見正雄・大塚光信編 (1971) 『抄物資料集成 6 蒙求抄』清文堂, 住谷芳幸氏によるテキストデータを検索に用いた。 / 中華若木詩抄…福島邦道編 (1983) 『中華若木詩抄』笠間書院 / 毛詩抄…倉石武四郎・小川環樹校訂 (1996) 『毛詩抄 詩経』岩波書店 / 玉塵抄・

四河入海・三体詩素隠抄…国立国会図書館蔵本。この3資料は、国立国会図書館「次世代デジタルライブラリー」で提供されているOCRテキストに対し、誤解析を念頭に置いて可能な限りの検索を行って用例収集を行った。よって、表に示した数値はあくまでも参考値である。

参考文献

- 青木博史 (2022) 「文相当句の名詞化」, 青木博史・岡崎友子・小木曾智信 (編) 『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』 pp. 89-108, ひつじ書房.
- 安部朋世 (2011) 「ムシロ・ドチラカトイエバ・カエッテの分析」 『千葉大学教育学部研究紀要』 59, pp. 241-245, 千葉大学教育学部.
- 于康 (1999) 『日本語に於ける不定語の構文的機能に関する歴史的研究』 溪水社.
- 牛島徳次 (1967) 『漢語文法論 古代編』 大修館書店.
- 大江元貴・居關友里子・鈴木彩香 (2020) 「日本語の左方転位構文はいつ, どのように使われるか?」 『社会言語科学』 23-1, pp. 226-241, 社会言語科学会.
- 大木正義 (1969) 「「なれば」「なれど(も)」の構文論的機能について——発生期のそれ——」 『国文学言語と文芸』 63, pp. 59-68, 大修館書店.
- 大坪併治 (1959) 「トイフハ・トイハ・トハについて」 『国語国文』 28-2, pp. 96-115, 京都大学文学部国語学国文学研究室.
- 大坪併治 (1969) 「提示語法について——訓点資料と今昔物語とを中心に——」 『佐伯博士古稀記念国語学論集』 pp. 15-36, 表現社.
- 大坪併治 (1982) 「原因・理由を表はす文末のバナリについて」 『訓点語と訓点資料』 67, pp. 123-138, 訓点語学会.
- 大坪併治 (1983) 「漢文訓読文におけるナゼニの成立をめぐって」 『国語学』 132, pp. 1-10, 国語学会.
- 小田勝 (2018) 「古代語における形式用言を用いた複合辞とその用例」, 藤田保幸・山崎誠 (編) 『形式語研究の現在』 pp. 3-20, 和泉書院.
- 北崎勇帆 (2022) 「原因・理由と話者の判断」, 青木博史・小柳智一・吉田永弘 (編) 『日本語文法史研究 6』 pp. 133-156, ひつじ書房.
- 金水敏 (2012) 「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」, 近代語学会 (編) 『近代語研究 16』 pp. 349-367, 武蔵野書院.
- 小谷博泰 (1986) 『木簡と宣命の国語学的研究』 和泉書院.
- 小西いずみ (2013) 「西日本方言における「と言う」「と思う」——テ形の引用標識化——」, 藤田保幸 (編) 『形式語研究論集』 pp. 301-317, 和泉書院.

- 小林千草 (2001) 『中世文献の表現論的研究』 武蔵野書院.
- 近藤泰弘 (2020) 「平安時代語に見られるジェンダー的性質について——通時コーパスによる分析——」 『日本語学会 2020 年度秋季大会予稿集』 pp. 285-290, 日本語学会.
- 清水登 (1995) 「院政期から室町期までの接続表現について——ナラバ・タラバ・ナレバを中心として——」, 近代語研究会 (編) 『日本近代語研究 2』 pp. 281-305, ひつじ書房.
- 鈴木博 (1972) 『周易抄の国語学的研究 研究篇』 清文堂.
- 高橋淑郎 (1999) 「「自問自答形式の疑問表現」の性格」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 12, pp. 55-76, 早稲田大学日本語研究教育センター.
- 竹内史郎 (2016) 「現代日本語における左方転位構文のタイプと起源」, 青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 3』 pp. 189-212, ひつじ書房.
- 築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版会.
- 辻本桜介 (2017) 「文相当句を受けるトナリについて——中古語を中心として——」 『ことばとくらし』 29, pp. 3-19, 新潟県ことばの会.
- 外山映次 (1957) 「質問表現における文末助詞ゾについて——近世初期京阪語を資料として——」 『国語学』 31, pp. 37-46, 国語学会.
- 中野遥 (2019) 「キリシタン版『日葡辞書』の「id est」について」 『訓点語と訓点資料』 143, pp. 58-41, 訓点語学会.
- 矢毛達之 (1999) 「中世前期における「文相当句+ナレバ・ナレド (モ)」形式」 『語文研究』 88, pp. 32-44, 九州大学国語国文学会.
- 矢島正浩 (2013) 「条件表現史における近世中期上方語ナレバの位置づけ」, 近代語学会 (編) 『近代語研究 第17集』 pp. 1-22, 武蔵野書院.
- 山本佐和子 (2021) 「中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法」, 筑紫日本語研究会 (編) 『筑紫日本語論叢Ⅲ——日本語の構造と変化——』 pp. 107-133, 風間書房.
- 湯澤幸吉郎 (1929) 『室町時代言語の研究』 大岡山書店.
- Rizzi, Luigi (2001) On the Position "Int(errogative)" in the Left Periphery of the Clause. In Guglielmo Cinque and Giampaolo Salvi (eds.) *Current Studies in Italian Syntax*. pp. 287-296. Leiden: Brill.

付記

本稿は「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究」2022年度第1回研究発表会(2022年12月3日),第10回川島拓馬を囲む会(富山日本語史研究会)(2022年12月29日)における発表内容に基づきます。発表の席上でご意見を賜った方々に感謝申し上げます。また,本稿はJSPS科研費(20K13049,21H04349)による成果の一部です。